

3) 1927年。ハレにて出版

5) 九鬼周造。『「いき」の構造』(岩波)、1930出版

6) エルンスト・グロッセ(1862-1927)は、フライブルク大学にて、哲学、人間学、美術史を講じ、その著書『美術の起源』(フライブルクおよびライプツィヒにて1894年に出版)は、一般に広く読み親しまれた。また、1920年代に執筆された3つの著述は、当時において、ドイツにおける日本文化理解に非常に大きく貢献した。そこでは、それぞれ、東アジアの造形美術、東アジアの水墨画、東京における収集美術品について論じられている。

7) 手紙や備忘録から成る未公開の草稿『日本再訪』による。この個人的な草稿に目を通すことができたのは、ひとえにレービットの未亡人であるアダ・レービット女史(ハイデルベルク在)の御厚意のおかげである。女史は、そのほかにも、生前のレービットについていろいろと筆者に物語ってくれ、また、ありがたいことに、必要な資料を自由に使わせてくださった。あわせて、ここに深く感謝の意を表する次第である。

15) レービットのこのような批判的な発言は、それだからといってけっして日本に対する軽蔑といったようなものを意味しているわけではない。このことは、続いて次のように述べられていることから明らかである。「しかし、このような性急な問いにこれまた軽率な答えを与えてしまう代わりに、我々は次のように自問してみることもできるだろう、――アメリカの学生は、ヨーロッパの古代・中世とどのような関係を取り結べるのだろうか。また、我々自身について言っても、我々と現実的な関係を持ち続けているものとして何を挙げるができるだろうか。我々の心に今でも深く語りかけてくるものとしては？我々固有の伝統のなかで現在でもなおそれを我が物とすることが生産的でありうるようなものは、いったい何なのか。単なる歴史的教養に対する欲求を満足させるためだけに、あるいは大学教授として学生たちに講義を施すという実際的な目的のためだけに哲学の営みが行なわれているようなことはないだろうか。

32) 第一次世界大戦後に始まったマイスター・エックハルトに対する熱狂的ともいえる関心の高まりは、同時に、禅に対する関心をも高めた。このことを我々はすでに、オイゲン・ヘリゲルの例に見ることができた。「仙台日独協会会報No.1(1983)」, p. 51-58、とくに p. 58を参照のこと。

33) この日記に接することができたのは、チュービンゲン大学図書館の厚意による。そこにあるエドアルト・シュプラランガー文庫の管理にあたれられているH.W. ペーア教授にはとりわけお世話になった。

レービットが日本に対して相矛盾する気持ちを抱いていたことがここから読みとれる。日本人の同僚が西洋の文物に対して或る相反する二義的な感情を抱いていることを感じ取ったレービットであるだけに、このことは注目に値する。

58) 「異なる考え方をする外国に移り住んでみてもまた歴史を統べる運命の力によっても成人した人間や一国の国民の本質というものが如何に変化し難いものか、それを実感したのはかなり後年になっての事でした。確かに新たに学ぶ事もあり、古きヨーロッパの残滓

を見つめるその眼差しは昔とは違ったものです。しかし別の人間になる訳ではありません。即ち昔のままではないのですが謂わば本来の自分ないしは本来自分に許された姿というものを見出すのです。」

カール・レーヴィット” Curriculum vitae “(履歴書)

ヘリゲルが仙台を去って後、暫くして再び一人の高名なドイツの思想家、今世紀のドイツ哲学にその名を残した人物が東北大学で教鞭を執ることとなった。1936年のカール・レーヴィット(1897-1973)の来日は、しかしながら極東に対する直接的な関心に導かれての事ではなく、政治的亡命がその動機を成していた。

ユダヤ系ドイツ人であった彼は1934年郷里を追われると共に、マールブルク大学哲学科の教職をも去ることを余儀なくされたのであった。レーヴィットはまずアメリカの奨学金を得て愛するイタリアに逃れた。というのも1915年若き志願兵としてドロミーテンで負傷し捕虜となって以来、イタリアは彼にとって心引かれる国となっていたからであった。既に1923年から翌年にかけて改めてイタリア(フィレンツェとローマ)を訪れる機会があったレーヴィットであったが、この度は当然の事ながら難民の一人としてローマにやって来たのであった。ここで彼は、同じきものの永却回帰を唱えたニーチェ哲学についての書物及びヤーコブ・ブルクハルトについてのモノグラフィー『歴史の中の人間』(1)を著した。

しかしながらイタリアをも巻き込み始めたファシズムを前に、彼はさらに遠くへと次の亡命先を求めることになる。「それが運命というものなのでしょうが、いくつかの幸運な巡り合せが重なって、私はローマからさらに日本の大学へと亡命の旅を続けたのでした。」とレーヴィットは回想している。(2)

幸いなことに、彼には1920年代後半、既にマールブルクで日本の学者たちと交際した経験があった。彼らはマルティン・ハイデガーの名前に引かれ、彼の地での哲学研究を志し、当時世界的名声を博しつつあった、この『存在と時間』(3)の著者の駆使する独特なドイツ語と懸命に取り組んでいたのであった。フッサール及びハイデガーの弟子であり、1928年マールブルクのハイデガーの下で、『人類の役割の中における個人』という倫理、人間学的著作で教授資格を得たレーヴィットの下にも、こうした日本の留学生たちが助言を求めにやって来た。彼らの中には、当時まだ講師として、ヨーロッパに留学中だった九鬼周造男爵(1888-1941)の姿も見られた。大変教養がある上に裕福でもあったこの哲学者は、ゲオルク・ジンメル(4)同様、「いき」についての本を著し、(5)1935年には京都帝国大学教授に就任しており、この時必死の思いで亡命先と職を探していたレーヴィットの為に

東北帝国大学外国人講師の職を世話したのであった。こうして彼は、前任者オイゲン・ヘリゲルによって当時既に日本の学界において確たる地位と名誉を占めていた教職に就くことになったのである。

イタリアとイタリア気質に心底魅了されていたレーヴィットであったが、さらに別の、非常に古く、優れた文化を見聞できるということに彼の心はずんでいた。1958年、当時を回想して彼はこう記している。「1936年、ナポリから『諏訪丸』で日本に向かった私は、既に40歳になっていました。家庭と仕事にしばられ、もはや自分自身の可能性を探るゆとりはありませんでした。私は自ら、現実という枠組みを自分自身に課し、それで満足していました。そして、そこに政治的亡命という枠組みがさらに加わることとなったのです。かつてイタリアがそうであったように、日本もまた私が自ら選んだ国というわけではありませんでした。それは全くの偶然でした。私が初めて日本という国を知り、興味をそそられたのは、恩師P. ヴインマー先生からラフカディオ・ハーンの『心』を借りて読んだ、実科高等学校時代でした。そしてその後フライブルクで東アジアの芸術についてのグロッセ先生(6)の講義を聴く機会にも恵まれました。先生は日本人の奥様をお持ちで、御自身のコレクションの中から、色々珍しい物を我々にお見せ下さいました。」(7)

1936年11月半ば、5週間に亘る船旅の末神戸港に着いたレーヴィット夫妻を出迎えたのは、当時仙台で教鞭を執っていた哲学者・仏文学者の河野與一(1896-1984)であった。その後彼は夫妻の良き友人として交際を続けることになる。京都で九鬼男爵との再会を果たし、さらに九鬼夫人の助けを借りて、東京で新生活に必要な物を調達した夫妻は、こうして東北日本の中心、「杜の都」へとやって来たのであった。彼らの住まいは片平丁にあった東北大学の宿舍であった。宿舍には長くて大きなベットと広い浴槽が備え付けられており、二人は大いに喜んだ。それは大男だった前任者、オイゲン・ヘルゲルの為に大学に設えたものであった。

夫人と共にレーヴィットも、この見慣れぬ、全く新しい環境に慣れねばならなかった。「日本は外国人にとっては先ず、自分自身とそして自分が長い間慣れ親しんだものが逆立ちしている、逆転した世界と映ります。」と彼は記している。(8)さらに別の個所では、「イタリアでは直様まるで水を得た魚のような心持ちになった私でしたが、日本の生活に慣れるのは難しく、骨が折れました。」とも述べている。(9)しかしながら彼が有難く思った事は、仙台が哲学上の彼の著作活動を継続・発展させる機会を与えてくれたことであった。「仙台で再び教壇に立った私は(……)この上もない幸運に恵まれたのです。何故なら、私は日本の学生を前に、マールブルクで中断せざるを得なかった所から再び始めることができたからです。」(10-a) 師にあたるエドムント・フッサール(1859-1938)は、レーヴィットに次のように書き送っている。「仙台に落ち着かれたとのこと、何よりです。仙台ならば、私の昔からの友人たちが同僚ということになりますね」(10-b)。ドイツのフッサールのもとで学んだ日本人の幾人かが、東北大学で教えていたのである。

当時の日本を覆っていた不穏な政局、そして自分自身の将来についての不確かさ、この

二つが動機となって、レーヴィットは精力的にこの地で学問研究に励んだ。こうして彼の主著の一つである『ヘーゲルからニーチェへ。19世紀思想界における革命的断絶』が書かれる。1941年チューリヒでまず出版されたこの本は、以後版を重ね、あの精神史上の転換期を扱った優れた論文の一つとして有名である。

彼の多岐に亘る学問上の関心（シェリング、ヘーゲル及びヘーゲル学派、フォイエルバッハ、マルクス）

ニーチェ、キルケゴール、ブルハルト、マックス・ヴェーバー等）は、当然の事ながら、その授業内容・重点の置き方に反映していたが、一方で彼はハイデガーの『存在と時間』等を学生と共に読んだり、或いはまた、文学の授業を受け持つこともあり、ドイツの言語・文化の紹介にも努めたのであった。授業はすべてドイツ語であった。「日本では誰も、外国人が彼らに順応し、アジア的になることを期待しないのです。それは彼らが外国人からヨーロッパ的思考方法を学ぼうと望んでいるからです。私は自分の授業を母国語で行なうことができました。」(11)

この新しい環境に、果してレーヴィットはどんな印象を抱いたのであろうか。彼はこう回顧している。「1936年、仙台の東北大学の教職に就いて哲学科の助手や学生たちと知り合いになってみて、私は彼らの学問的関心に少なからず驚かされました。そこには原語で、ヘーゲル、プラトン、ヒューム、カント、キルケゴール、K.バルト、ヤスパース、ハイデガーを学ぶ学生たちがおり、またドイツ文学科にはニーベルンゲン・リートを学ぶ学生がいたのです。教授の講義題目には、例えば、ワーグナーのオペラにおけるドイツ神話、ゲーテのイタリア旅行、シェークスピア及びブレイクの文学、といった表題が並んでいました。また哲学科には、ヘーゲル、カント、印象学、実存主義の研究者たちがおり、ドイツと何ら変わる所がないのです。そして研究雑誌にみられる論文のテーマも私たちのそれと全く変わらないものでした。」(12)

当時を振り返って、レーヴィットは後年、仙台の彼の下で学んだ「非常に知的で、多くは魅力的な学生たち」(13)に対する好意と称賛の念を表わしている。しかし同時にまた、当時の同僚たちに対する深い尊敬の念を表明することも彼は忘れていない。「日本の哲学教師はその殆んどが、ドイツへの留学を経験していました。あのインフレーション時代、彼らは日本の大学の為に次々と書籍を買い集めていたのです。そして近代ドイツ哲学者の中、三人の完全な蔵書を仙台で見つけた私は、少なからず驚かされました。しかし彼らはそれをただ買い集めただけではなく、自分の研究テーマに関する文献すべてに目を通しておこうという飽くなき学究心から徹底的に読み込んでくれたのです。」(14)

ドイツの哲学やヨーロッパの精神的伝統を吸収しようという、日本人のこうした努力に対し、感嘆と称賛の念を禁じ得なかったカール、レーヴィットであったが、と同時に、ある種の疑問もこの冷静で懐疑的な思想家の心にわいてきたのであった。それは、こうした感銘深い向学心も多くは単に歴史的な教養を身につけたいという気持ちの現われに過ぎないのではないか、という疑念であった。「ヨーロッパの歴史・文芸・哲学を熱心に勉強する

日本人の姿を冷めた目でみた時、我々外国人にとっては、どうしても次のような疑問が浮んで来ざるを得ないのです。一体彼らはそこから何を学び、何を始めようとするのでしょうか。それは一体彼らとどんな関り合いがあるのでしょうか。」(15)

とりわけ彼の注意を引いたのは、若い頃西洋に留学した経験を持つ日本の学者たちの多くが、歳をとるにつれて次第に東洋の伝統に立ち返ってゆき、芭蕉や万葉集、或いは能面や神楽等の研究に携っている姿であった。そこにレーヴィットは、西欧精神に対する「傾倒と反発」(16)の間で揺れ動く日本人の心を感じ取った。それ故、「西欧の精神史を見極めようという姿勢と才能」(17)にあふれた日本人の真摯な努力を認めつつも、その結果に関して懐疑的であった。

本質的にそれも彼の日本体験に属する以上、ここで見過ごす訳にいかないのは、日本人の生活・心情の中に明らかにレーヴィットが反発を感じた点が幾つかあった、ということである。彼の学生たちが無意識のうちにみせる、これまで通りの日本的な考え方や行動様式、それは彼にとっては大きな謎であり、改めて東洋と西洋の相違を痛感することも稀ではなかった。そしてそれは、1940年の論文『ヨーロッパのニヒリズム』(18)に添えられた「日本の読者のためのあとがき」にはっきりと読み取ることができる。

そこでレーヴィットはヘーゲルを引用しながら、古代ギリシア人に備わっていた「体得の力」を称えている。何故なら、彼らは異国に根を持った世界を改変と加工とによって、完全に自らの物としており、それ故、「その中で彼らが、今日の我々と同じく、価値をおいたり、認めたり、愛したりするものは、殆んど本質的に彼らのものとなっている」(ヘーゲル)からである。(19) こうした「自己の外にあんなに自由に歩み出ること、そしてその結果生れる体得の力、自己及び世界に対する自由な態度から生ずる体得の力」(20)こそ、彼が日本人には欠けているように感じた特性なのであった。そしてそれは、日本ほど外国に対し門戸を広げ、また東洋と西洋の統合を体現している国は外にないという、日本人の多くが抱いていた自負の念に真向から対立するものであった。

レーヴィットは言う、「この自由な体得という特性が、私には、日本では大抵の場合欠けているように思われます。もちろん学生は懸命にヨーロッパの書物を研究し、事実または、知性豊かな彼らはそれを理解もしています。しかし、彼らはその研究から自分たち自身の日本的な自我を肥やすべき何らの結果も引き出してこないのです。(……)彼らはまるで二階建ての家に住んでいるようなものです。階下ではプラトンからハイデガーに致までのヨーロッパの学問がずらりと並んでいるという訳です。そして、ヨーロッパ人の教師は、ところで二階と一階を往き来する階段はどこにあるのだろうか、と疑問に思うのです。」(21)

レーヴィットにとってとりわけ重要に思われたのは、当時特に広まっていたヨーロッパに対する誤解を、日本の読者の前で解いてみせることであった。そして彼が明らかにしようとした事は、近代ヨーロッパの危機的状況を「西洋の没落」などというものの兆候と考える必然性はどこにもないこと、さらに、あからさまな批判や自己批判、学問的精神、決然たる思考や行為、不愉快なことでも直截に言表すること、他人を論理的帰結の前にひき

すえたり、自ら論理的帰結を引き出したりすること等の中に見ることのできる「否定することの建設的な力」(22)をヨーロッパ精神が如何に利用しその進歩を築き上げてきたのかということであった。「ヨーロッパ精神は、なによりもまず批判の精神であり、区別し、比較し、決定することを弃えています。(……)東洋は、こうした容赦のない批判が自分に加えられるのにも、他人に加えられるのにも、堪えることができないのです…」(23)

仙台時代のレーヴィットは、どちらかと言うと、書齋に引き籠もって、主にドイツやヨーロッパの哲学研究に没頭することが多かったが、そこには、一方で東洋と西洋の精神の交流が活発だったにもかかわらず、真の相互理解に欠けていたという、こうした事情も少なからず作用していたものと思われる。こうして、オイゲン・ヘリゲルやまたクルト・ジンガーと比べると、レーヴィットには、日本の文化や生活を積極的に吸収しようという気持ちは少なかったように思われる。そして、そこには当時の時勢と共に彼自身の気質も大いに関係していた。

レーヴィットの友人かつ同学の士であり、またマールブルク大学とハイデルベルク大学の同僚でもあった、ハンス・ゲオルク・ガーダマー(1900年生)は、彼のことを孤高を求めた「非常に内向的な人物」(24)と評している。さらに彼の回想録は以下の様に詳しくレーヴィットの人となり伝えていいる。「カール・レーヴィットは、紛れもなく独特な個性の人であった。深い存在の悲しみが彼を包んでいた—同時に彼は、我々に課せられている存在がもつ未知のもの、不審なものに対して、この上なく威厳ある覚悟を保持していた。ある捉えがたい落書きが彼に生气を与えているようであった。教師にありがちなちょっとした強調に高まることもほとんどない、彼の声の様な調子に、その落書きがありありと現われていた。(……)この落書きの基礎の上に、生来の距離感覚、隔りに対する感情と絶えざる隔りの意識があった。彼は自分自身に対して、友人に対して、人間に対して、世界に対して、つねにこの距離を保っていた。」(25)

(中村志朗訳『哲学修業時代』未来社刊より)

興味深いのは、レーヴィットの生涯と著作に詳しい、この哲学者が友人の日本での生活について語っている、次のような言葉である。「運命の糸に導かれて彼は(……)日本の仙台で、名高い帝国大学の教職に就くこととなった。彼の一種超然とした、運命論的な性向のみならず、その繊細な美意識と世界及び人間に対する威厳ある距離感覚、これらによって日本はこの上もなく理想的な所であった。先生に対する態度に見られる、東洋と西洋の間の大きな隔り、それがこの場合レーヴィットにとって都合良く働いた。東アジアの文化が彼らの師に対して払っている畏敬の念、あの距離を保った、控え目な尊敬の気持ち、それはレーヴィットの性格上、平気で教授の肩をたたくような陽気であけすけなアメリカ人学生の態度に比べ、はるかに好ましいものと思われたに違いない。」(26)

1967年ガーダマーによって、当代ドイツ哲学界切つての名文家と称されたレーヴィットが、日本についての本格的な著作を何も残さなかったのは誠に残念である。ヘリゲルもそしてジンガーも、それぞれ独自の観点から、当時も今も専門家の間で高い評価を得てい

る日本研究の書物を著しているが、それに反してレーヴィットはその滞在経験を一冊の本にまとめることはしなかったのである。しかしながら彼が日本から少なからぬ影響を受けていたことは、東洋と西洋を詳しく論じた、かなりの数にのぼる文章に観て取ることができる。それらは様々な時期に、或いはまだ日本で、或いはアメリカやヨーロッパで書かれ、色々な形で発表された為、一般読者は最近まで、まとまった形で彼の滞在経験の詳細を知る機会是与えられなかった。初めてレーヴィットの全体像を示すことになる、現在刊行中の『全集』を読んでみて驚かされるのは、日本に関する記述が一内容的に多少の重複があるにしても一70頁にものぼっていることである。

1942年から翌年にかけて、レーヴィットは二度に亘ってアメリカの雑誌に、当時アメリカ人の誰もが強い関心を抱いていた日本に関する論文を発表した。折しも日本と戦っていたアメリカにとって、相手の精神構造を理解しておくことが緊急の課題とされていた時代であった。論文にはレーヴィット自身がつけたというより、むしろ編集部の政治的意向を表わしている、次のような副題が冠せられている一『勝利を得るために知っておかねばならぬ国民性』。それだけに一層注目に値するのは、半ば日本を追われた形でアメリカへ亘ったにもかかわらず、レーヴィットの記事には皮肉も敵意も一切感じられず、全く公平かつ冷静な目で捉えた正確な日本の姿が描かれていることである。そしてこれは今日でもなお一読に値する論文の一つである。

高名な日本の哲学者、西田幾多郎(1870-1945)の思想に影響を受けていたレーヴィットは、こう記している。「日本文化の特殊性は、矛盾をはらんだ一つの文章、17文字の詩、墨絵の中の本線の線といったもので、宇宙の本質を語ろうとする所にあります。無常が彼らの人生観の特徴です。一刻一刻が、そしてまたその束の間の生こそが、絶対でもあり、重要なのです。従って、跳びはねた蛙、こおろぎの声、朝日に輝く露、そよ風、といったものが彼らの詩の典型的な題材となります。想像力を磨かれた日本人の心には、こうした瞬間が永遠の時と感じられるのです。彼らは常に、移り変わる自然の中に絶対的な現実体験を求めて、身構えているのです。中国の空間の哲学が大理石で出来た大建築を建てたのに対し、日本の時間の哲学は小さな木造建築ないしわらぶき小屋の内に静かに安らってきたのです。」(27)

哲学的には最後まで自分を育ててくれたヨーロッパ精神に忠実だったレーヴィットも、日本文化を貫く禅の精神に対しては深い理解を示していたことが、こうした記述からもうかがわれる。ヘリゲルのように日本の文化を直接身につけようとはしなかったものの、自然と芸術を愛する繊細な学者だったレーヴィットは(彼の父は画家であり、美術大学の教授でもあった)、天性の美意識に支えられて、しだいに日本文化への理解を深めていったのであった。「マールブルクで踏み出した自らの道をさらに歩み続けながらも、今や身近なものとなったこの極東の文化が私の心を引きつけました。この日本という国、そしてそこに暮らす人々、さらに彼らの洗練された文化と偉大な仏教芸術、それらがどれ程私の心を魅了したことか、それはとても一口で言い表わすことはできません。」(28)

日本を離れるレーヴィットは西田から自筆の墨絵を贈られた。それは黒い円が一つ描かれただけのもので、端には次のような言葉が記されていた。「直訳すると、それは、月（＝心＝精神）、孤独、円光、万物（＝全存在）、呑む、となります。（訳者注：原文は「心月以円光呑万象」）そしてその意味する所はおよそ以下の通りです。円となり、空となった精神が、満月の孤独な月明りのように、存在する物すべてを照らしだし、そして包み込む。」（29）日本の哲学や文芸では、目もくらむ程ギラギラと照りつける太陽の光に代わって、やわらかく又冷やかな、いわは「非個人的」な月明りが、真の悟りを表わす象徴とされてきたことを、レーヴィットはよく知っていた。「心の月明かりは、すべてをあるがままに照らし出します。何故ならそこには初めも終わりもないからです。現実存在するもの、それは永久不変なのです。」（30）西田が描いたこの黒い円はレーヴィットにとって疑いもなく、無限で、究極的な規定というものを拒否した「円」という東洋の理想を具現しているように思えた。そしてこの貴重な絵を通して改めて彼は、悟性の持つ否定的な力によって、すべてを合理的に規定し尽そうとする西洋的な思考が、純粋に東洋的な思想には欠けている、という事実を再認識したのである。しかしながら、レーヴィットはこう続けている「この欠点は同時にまた長所でもあり、他に比べてより優れた点でもあるのです。即ち、それは規定されていないもの、また規定されえないものを、そのままの形で受け入れ、正に規定し得ないというその性質故に、自らの心のままにそれを円く閉じれた智の初めや終わりとして捉えるということです。」（31）

造形芸術を愛好したレーヴィットは、同僚の中にドイツの芸術学・古代研究に詳しく、またドイツ語にも通じていた二人の美術史家を見出し、親交を結んだ。一人はヴィルモビッツ・メレンドルフの弟子であった児島喜久雄（1887-1950）であり、またひう一人は当時の助手であった澤柳大五郎氏（1911年生）である。ギリシア壺絵の専門家とし著名な澤柳氏の世話で、レーヴィット夫妻はたびたび日本各地を旅行し、見聞を広めたのであった。――残念ながら、レーヴィットと様々な分野の日本の同僚の方々との交流について詳述するゆとりはここにはありません。当時の彼を実際に御存知の皆様、皆様からの御寄稿を心からお待ちしております。仙台でのレーヴィットの生活ぶり、彼に対する個人的な思い出といったものを、どうぞ「仙台日独協会会報」までお寄せ下さい。仮にもし、その後世界があれ程激しい変動の時代を迎えることもなく、そして日独の友好関係も国内的な或いは外交上の様々な要因に左右されることがもっと少なかったならば、こうした事もっと早い時期に試みられていたことでありましょう。それは困難な、暗いそして不自由な時代でした。日本でもそしてまたドイツでも、不幸だったあの時代をあまり思い出したくないという人が少なくないのです。

風雲急を告げていた当時の政治状況は、やがて様々な形でレーヴィットをも苦しめることになる。東京のドイツ大使館はレーヴィットにパスポートの提出を求め、改めてユダヤ人用のパスポートを彼に交付した。あらゆる面で当時の政治状況を色濃く反映していた帝都東京に比べ、彼にとって非常に幸運だったのは、仙台には未だ静かで落ち着いた、比較

的自由な空気が残っていたことであった。そしてこの幸運に対しては、レーヴィット自身後に感謝の念を表わしている。

やがてドイツ・ナチズムの嵐は、仙台の教育・文化の領域にまで間接的な影響を及ぼした。一もって、それはドイツの支配層の意図したところとは随分異なっていたが。外国人講師に関してはかつて日本のどの都市にもなかったような素晴らしい陣容がここに整えられたのであった。即ち、レーヴィットに加えて、ユダヤ系故にやはり亡命を余儀なくされていた、才能豊かな、優れたドイツ人学者がもう一人仙台で教鞭を執ることとなった。クルト・ジンガー（1886-1962）がその人である。

哲学と文学に通じ、誠にヘリゲルとレーヴィットと並び称されるに値するこの親日家については、次回で詳しく論ぜられることになるであろう。共にこの地での亡命生活を余儀なくされていた二人の間には、仲間同志の良き信頼関係といったものが生まれた。哲学への関心と並んで二人を結びつけていたのは、共に著名な詩人シュテファン・ゲオルゲ（1868-1933）のサークルに魅力を感じていた青年時代の思い出であった。その精神世界から生涯離れることのなかったジンガーに対して、レーヴィットはまずハイデガーへと傾倒し、さらに後年になると、それに対しても批判的な距離を取ることになる。しかしながら、二人の間の私的な交際も、また学問上の刺激的なやり取りも本当に親密な友人関係と呼べるものまでには至らなかった。彼らはそれぞれの道を歩んだ。そしてそこには、また、二人が別々の異なった学校で教えていたという事情も働いていた。片や東北帝国大学であり、片や全国的に名が知られてはいたものの、大学への予備門とされた第二高等学校であった。

思いがけずもここでレーヴィットは二人の著名なドイツ人と出会うことになる。一人は、ライプツィヒの有名なゲシュタルト心理学者、フェリクス・クリューガーのかつての助手であり、またレーヴィットの戦友でもあった、心理学者カールフリート・デュルクハイム男爵（1896年生）、その人であった。彼はマイスター・エックハルト（32）の研究を通じて禅の教えに触れ、その研究の為に1937年から日本に滞在していたのだった。東洋の禅を形而上学的人間学に取り入れ、さらにそれを精神治療に応用しようとした、注目すべき彼の研究に関して、日本では少数の専門家以外、その業績を知る人は少ないが、ドイツでは彼の著作（『日本、静の文化』、『忘れ得ぬ思い出』、『ハラー人間の中心』、『日々是修練』、『禅と私たち』）が、今でも版を重ねている。デュルクハイム男爵の来日には、実は彼が本国で「政治的不穏分子」と見做され、研究費まで支給されて、東京のドイツ人たちとの折り合いもレーヴィット程悪くはなかった。従って、彼にとって仙台のレーヴィットを訪ねるといふことは、ある種の危険を伴っていた訳で、その訪問は夜陰に乗じて裏口から、ということになったのである。

1936年から翌年にかけて、ベルリンの著名な哲学者、教育学者のエドアルト・シュプラングァー（1882-1963）が日本へとやって来た。表向きは公の使節として来日した彼も、実のところは本国における身近上のトラブルから一時的に逃れてきたのであった。1937年6月

初め、シュプランガーは夫人と共に仙台を訪れた。東北大学は二人に松島の宿を用意していた。「宿は海のすぐ近くで、入り江には白砂と深緑の松林におおわれた、200余りの島々が点在しています。この国では当地を日本で最も美しい風景の一つに数えていると聞きましたが、それも無理からぬことと思います。」こうシュプランガー夫人は、彼女の書簡風の日記に綴っている(33)。そして、「仙台へは毎日通ったのですが、これもまた大変楽しいものでした。大学の教授の名かには、ドイツ語にも通じた親独家の方々が大勢おりました。二度に亘る講演会と並んで、学生との『討論会』なるものも催され、参加したのは主に講師や助手の人たちでしたが、すぐにこの上なく活発なやり取りが交されました。なかにはかなり厄介な質問をする学生もいましたが、エドアルトの答えに一応満足したようでした。テーブル・スピーチでは(……)ある方が、『誠にシュプランガー教授のような優れた先生をお送り下さったドイツ政府の御厚意に心から感謝いたします。』とおっしゃって下さいました。それがどんなに嬉しいものであったか、御想像いただけたと思います。ドイツと日本の友好関係をあの時程身近に、また心から感じたことは他にありません。」

シュプランガー、レーヴィット両夫妻が揃って写っている44頁の写真は、その時神学者、石原謙氏の自宅で撮られたものである。彼はヘリゲル及びレーヴィット夫妻にとってとりわけ親しい、心から友人と呼べる人物であった。ナチズムを逃れて亡命中だったレーヴィットと政府の文化使節として来日したシュプランガー、1937年6月、仙台。正に歴史的な写真である。

日独軍事同盟が締結されると、日本にも日増しにナチスの影が忍び寄り始め、レーヴィットの身辺も慌しくなってきた。仙台でも自分を快く思わない人たぎ中には出始めていることを彼は感じ取った。こうして再び次の亡命先を探していたレーヴィットは、ドイツ系アメリカ人の神学者、パウル・ティリッヒ(1886-1965)とラインホルト・ニープウアー(1892-1971)の紹介で、今度はアメリカのハートフォード神学財団の神学ゼミナールで、宗教史及び宗教哲学を講じることとなった。日米開戦の半年前の事である。そして1949年、彼はそこからさらに、1933年以降「亡命大学」の名の下に、主に国を追われたドイツの学者たちが集っていた、ニューヨークの新社会科学研究所に招かれることになる。出立前レーヴィットが蔵書の大半を持ち込んだ、仙台の古書籍商が著者に語った所によると、再び流浪の身となって、貴重な本を売らなければならなくなったこの哲学者が見せた辛そうな足取りと悲しげな表情は、彼にとって同情を禁じ得ないものであった、ということである。18年間に及ぶ亡命生活を終えて、レーヴィットは1952年、夫人と共に帰国した。世界各地での様々な経験を通じて、精神的に一層深みを増して帰って来た彼は、ハイデルベルク大学で哲学を講じ、国の内外を問わず、名実共に一目置かれる存在となった。1973年5月24日、第一次世界大戦で傷めた肺の病に長年苦しめられていた彼は、ついにハイデルベルクで永眠した。

レーヴィットはヘリゲルの場合とは異なり、日本を再訪する機会に恵まれ、想い出深い土地で昔の友人、同僚そして生徒たちと旧交を暖めることができた。1958年秋、彼は

東京で開催された第9回国際宗教学会への招待に応じたものである。こうして彼は再び仙台を訪れる、「一も二もなく飛びついた絶好の機会」を与えられたのであった。改めて日本各地を旅行しながら、彼はキルケゴールの言葉を思いに馳せる。「学生時代出合って以来、人格形成というのは、『自分自身を取り戻す』ことであり、過去を『繰り返し』そして取り返すことである、というキルケゴールの言葉です。(……) 自分を取り戻す為の、そうした回帰、反復がないと、人は常に先の事しか考えません。人や物を体験する、その仕方には二通りあって、それは全く異なったものです。まず一つは、最初の、そしてかけがえのない体験です。それは繰り返すことはできませんが、歳を取るにつれてその新鮮さは多少色あせても、死ぬまで忘れることのない強く、深い印象を刻み込むのです。そしてもう一つは、一度通った道を再び歩んで、人や物を再発見するという体験です。しかし反復というこの体験は常に旨く行くとは限りません。思い出というのは人に期待を抱かせることが多いもので、失望に終わる場合が少なくないからです。」(34)

様々な楽しい思い出の残るこの地にレーヴィット自身が抱いていた期待は、しかしながら裏切られることはなかった。確かに、そこにはかつて見た、あの街並みの美しさはもはや感じられなかった。「戦争で爆撃を受けたこの街も既に復興して、一番丁はどこも『近代化』され、映画館や百貨店が建ち並んでいます。ビルの屋根には至る所ネオンが輝いて、まるでアメリカの工業都市にある下品なメイン・ストリートの様で、仮にも美しいとは言えません。」こうしてレーヴィットは、戦争の犠牲になった昔の仙台、木造の家々が建ち並んでいた、あの美しい城下町を懐かしむのである。しかしながら一方で、「けれども片平丁から見る川と山の眺めは今も変わらず美しい」と付け加えている。そして彼は昔の宿舎を探したのだった。「私たちの昔の家はもうありませんでした。庭にはまだ桜の木が何本が残っていましたが、今ではそこに農業研究所が建てられていました。」(35)

それまで降り続いた激しい雨も止み、青空の下9月の太陽が輝くある日、再訪の喜びと胸おどらせ、彼は再び仙台郊外を訪れた。かつてのシュプランガーの様に、松島に宿をとった彼はその時の印象をこうつぶっている。「松島は本当に行った甲斐がありました。あそこはとても静かで落ち着いた雰囲気があり、窓からは松林におおわれた、沢山の小さな島々や長く伸びた朱色の橋を眺めることができました。シーズン・オフでしたので、宿の客は大抵私一人でした。ユカタ姿でくつろぐ、お風呂上がりの観光客を何組か見かけたぐらいです。宮城県の名産、コケシを大小様々取り揃えた店屋さんが並んでいたのも、私も白黒二色のコケシ一体を求めました。狩野派の絵のある禅寺、瑞巖寺に通じる素晴らしい杉並木の側では、子供の玩具にと小さな亀が売られていました。伊達藩時代に建立された、もう一つの有名な神社では、背中の曲った大勢の老婆が杖をつきながら歩いているのに出会いました。すると、そのいちの一人がキモノの裾をたくし上げて、その場で小用に及んだのでした。」(36)

くつろいだ、楽しい気分と共に、彼の親しみのこもった、曇りのない眼差が感じられ、ここに我々は作家レーヴィットをみることができる。また盛岡から仙台へ向かう車中では、

自然豊かな東北の農村風景が目に入る。「午前中は天気良く、輝く太陽の下美しい風景を目にすることができました――糸杉の森、実り豊かな水田、水玉模様の手ぬぐいや平らな麦わら帽をかぶった農婦たち、わらぶきの農家、小さなトリイと神社、川で釣をする人たち、丸顔でぽっちゃりとした大勢の可愛らしい子供たち、そして大きな果樹園と虫よけの袋を被せたリンゴの実。」(37)

さらに彼は昔の教え子たちとの再会に胸躍らせる。「昔のように私を慕ってくれる日本での私の教え子たち、彼らの律儀さは全く他に例をみない程、偽りのない、真心からのもので。」(38) こうして彼は再び訪れた仙台で心暖まるもてなしを受けたのであった。当時彼を迎えた人々の中には、かつて助手として、ニーベルンゲン・リートを学び(47頁参照)、今やドイツ文学科の教授となっていた柴田治三郎氏やレーヴィットの教え子で当時東北大学外国人講師の職にあったエドムント・ヘルチェン氏(現名古屋大学外国人教師)がいた。――さらにヘルツェン氏の前任者もまたレーヴィットの教え子であった、ゲルハルト・クナウス氏(現ザールブリッケン大学哲学科教授)である。こうして東北大学ドイツ人講師のポストは、戦後永きに亘って、名実共にカール・レーヴィットとのつながりを保ち続けたのであった。

洗練され、かつまた人間味あふれる彼の人柄を示すエピソードがある。仙台を訪れたレーヴィットが切望したことの一つに、昔のお手伝いさんとの再会があった。やっとの思いで探し出した彼女との再会の様子は、あまり詳しくはない彼の回想録の中では、珍しく詳細に描かれている。「大変嬉しかったことの一つは、かつて私たちのお手伝いをしていた吉野サンを高山町に訪ねることができた事でした。彼女は今では農家に嫁いでおり、自分たちの子供がいないので、戦死した義理のお兄さんの子供を三人ひきとって一緒に暮しているのだそうです。その日は雨で、狭い山道はひどくぬかっていました。その家は海に近い丘の斜面に建っていて、向い側にはイギリス人やアメリカ人の別荘もありました。すべって転ばないように気をつけながら、ぬかるみの中を歩いて行くと、大きなゴム長をはいて途中まで迎えに来てくれた彼女に出会いました。通訳の柴田さんを通して色々尋ねる私に、彼女は、わざわざお寄り頂いて本当に光栄ですと、何度も深く頭を下げ、また私がオクサマの様子を伝えると何度も『ソウデスネ』を連発していました。彼らが住んでいたのは大きな古い農家でした。座布団とお茶を出してくれ、さらにご主人は、私たちが戦後吉野サンを探して出した新聞広告の切り抜きや私たちの写真などを集めたアルバムを見せてくれました。二日後私が仙台を主立するという朝、彼女は高山町から朝8時のバスに乗って、晴れ着姿で駅まで見送りに来てくれ、オクサマにどうぞと、一包みのフロシキを私に手渡してくれたのでした。」(39)

こうしたレーヴィットの思い出は、彼の日本体験が実際どのようなものであったかを生き生きと伝えると共に、日本に対する彼の好意的な感情をはっきりと表わしている。しかし同時に見過ごされてはならないことは、こうした言葉の内に流れている、レーヴィットの自己抑制とも言うべきものである。慎重で抑制の効く人間であった彼は日本の現実を前

に「共感と戸惑いの間を揺れ動き」(40)ながらも、バランスを保ちつつ、これまでと同様、熱狂的な気分にはひたることはなかった。

日本そしてとりわけ仙台での体験が彼に与えた影響を総合的に捉えようとする者にとって、こうした個人的な思い出—確かにそれは重要な資料の一つではあるが—や、直接日本を扱った論文に加え、さらにここでレーヴィット哲学全体をも一瞥しておくことが必要となるであろう。そうした著作には、彼が東洋で過ごした歳月の跡がくっきりと刻み込まれている。

あらゆる形而上学的思弁に対して批判的であったレーヴィットは、また同様に、秘かにかつ熱狂的に執り行なわれる宗教儀式やすべてを調和しようと試みる、感情的・神秘的な自然賛歌・自然崇拜に対しても懐疑を抱いていた。しかしながら一方で、彼は繰り返し、西欧の歴史哲学や人間学が唱えるあまりにも普遍主義的な論理と、東洋の人生観・世界観を支える二つの本質的な特徴とを対置している。即ちそれは、自然の持つ自然性といったものへの普遍的な信頼と、それ故メシア的思想とも終末論的来観とも全く無縁な、世界に対する人々の自然で敬虔な態度である。

ここで再びレーヴィットを引用しよう。「ヨーロッパを続ける古い日本の姿ではなく、変らぬその東洋的な伝統であり、神道という彼らの古い宗教です。自然界そして日常生活の中にみられるあらゆるもの—太陽と月、成長と消滅、四季、樹木、山々、河、石、生殖力や食物、田植えや棟上、祖先や天皇家—を素朴に崇拝する姿に接して初めて私は、我々にとって同じく異教である、あのギリシア・ローマの政治宗教が多少理解できたように思います。そこに共通しているのは、現存する超人間的な力に対する畏れと崇拝の念です。それは日本では『カミ』と呼ばれ、ローマでは”superi”と呼ばれましたが、共に意味する所は同じで、我々人間の上に位する『上位者』ということです。こうして人間の日常生活を統べる超人間的な力を認める人々が、地震や台風、戦争や爆撃といった運命に対して取る態度は、無条件にそれを身に委ねるというものです。」(41) さらに、「ギリシア・ローマ時代には公的生活全般に亘って彼らの宗教が社会を司っていた、とヨーロッパの学校で学んできた者にとって、日本で驚かされる事の一つは、正にギリシア・ローマ同様、自然界そして日常生活の中に存在するあらゆる物を崇拝するという昔ながらの宗教が、まるでキリスト教というものが存在しなかったかのように、生き生きと存在している姿なのです。」(42)

こうしてニーチェに精通していたレーヴィットが日本で見出したものは、驚いたことに、ニーチェが心酔し、近代にその精神を復活させようとした、あの前キリスト教的な古代ヨーロッパの生活世界であった。しかし、ニーチェが古きギリシアを理想像と考えたのに対し、控え目ながらもレーヴィットは、彼がイタリアで出会いそして身につけた「人間的懐疑」を支持した。「それはローマ時代後期の遺産で、キリスト教の影響を受けており、すべての人間的なものが免れ得ないはかなさというものを弁えています。」(43) 人生の皮相さ、はかなさというのは、また仏教が唱える所でもある。従って現代ドイツの著名な哲学者、

ハイデルベルク大学のディーター・ヘンリッヒが指摘しているように、レーヴィットは「自分の思索を証拠立てる為古代の精神を呼び出した」に留らず、「彼がその貴重な5年間を過ごした東洋の精神をも同じ様に」引き合いに出しているのである。(44) こうして「東洋の心」に倣いつつ、彼は「かつて懐疑に悩まされたローマ時代のストア学派同様」、(45) 形而上学の罫を切り抜けたのであった。「自分にとって、哲学を規定するものは、それが説き明かすものではなく、それが規準として我々に示す所のものである。その目的は真の幸福であり、そこへ至る道を開くのが哲学である。それは真の悪とそうでないものを見分け、我々の心から虚栄心を追い払い、実体の伴わない見かけ倒しの偉大さを打ちのめす。哲学は我々に、自然全体そしてそれを通してさらに、哲学自体を知らしめてくれる。そうして我々は真の偉大さと儀のそれとを見分けることができるようになるのである。これが、カール・レーヴィットが通じていた、セネカの考え方であった。」(46)

(絶えず変化し、見通しも予測もつかないままに流れて行く歴史に対して意識的に際立たせる形で)、常に変わらぬ自然を語るレーヴィットが、果してどの程度ローマ後期のストア学派から思想的影響を受けているのか、これは現在尚論争的となっている。現代ドイツの有名な哲学者、ユルゲン・ハーバーマスは、一方において「この優れた精神に対して」

(47) 心引かれる自分に戸惑いつつも、レーヴィットにおける「歴史意識からのストア的撤退」なるものに激しい批判を受けている。これに対して、レーヴィット全集の編集者の一人、クラウス・シュティッヒヴェーは次のように述べている。「カール・レーヴィットは『ストア的』な立場を取っている訳ではなく、人間的な態度というものを—あまり強調し過ぎることを良しとしなかったレーヴィットですので、全く控え目な口調ではありますが—我々に示しているのです。それは首尾一貫性」という点においては欠ける所のあるものの、実際に我々が取りうる可能性のある態度と言えるものです。人間のあらゆる組織化に対して懐疑的な距離を保とうとするこの態度が、どこまでそれ自体で積極的な役割を果たしうるものなのか、或いはまた、果して賢明な一個人の態度表明といったもの以上でありうるのか、これらの点については残念ながらレーヴィットは何も語っておりません。」(48)

彼の著作の中には確かにそれを支持しているように取れる箇所が多々見出せるが、果して、断固として再び自然に依拠しようとするレーヴィットの思想が本当に古代ギリシアの宇宙論への回帰を意味しているものなのか、シュティッヒヴェー同様、我々もまた疑問を抱かざるを得ない。というのも、歴史の過大評価を戒め、「世界」を「歴史」としてすべて説き明かそうとする試みに対して批判を加えたレーヴィットの底に流れているものは、むしろ「彼が数年を過ごした東洋の人々が持つ視点への移行」(49) といったものだからである。「我々が熱心に問うてきた歴史の意味や目的を全く問題としない東洋の智」(50) は、レーヴィットにとって、単なる曖昧で抽象的な、実感を伴わない認識を超えて、実体験に基づいた、この上なく重要な発見と思えた。「我々ヨーロッパ人の歴史観も決して絶対的なものではない」(51) 事が、いよいよ明白となってきた。こうして彼は、東洋の人間観が有する一面性を明らかにすると共に、自ら—東洋での体験に基づいて—新たな人間観を確立

しなければならぬ、という気持ちになったのであった。そういった意味で、彼が『人間の単一性と多様性』(52)という論文を著したのが、仙台であった事は注目に値する。さらに、1946年アメリカで発表され、「東洋にみられる精神性を特徴付けるもの」(54)として沈黙を捉えた『言葉と沈黙』(53)も、その基礎を成しているのは、彼が日本で経験した異文化体験なのである。

近代の中で、永遠の自然という古い哲学的問題を、人間の本質に関する哲学・人間学の問題との関りのうちで捉え直すという作業をニーチェより学んだレーヴィットは、ヘーゲルやマルクスの歴史主義的立場のみならず、彼の師、ハイデガーの実存論的存在論に対しても批判的距離を保ち続けた。そしてこれがレーヴィットの「東洋と西洋を統合しようとする世界体験」(55)の中心を成していたのであって、「世界そのものは我々なしでも存在する。それは超人間的で、完全に自足した存在である。」(56)というレーヴィットの言葉には、分を弁えた人間の謙虚さと共に、東洋の人生観を特徴付けているとされた、あの自然に対する従順さといったものが感じられる。彼は「人間が完全な自立を求めて足元を見失う」(57)事を恐れていた。このように、レーヴィットが目指していたものは、人間が自分の内には見出すことができないでいる人間性の尺度といったものを再び彼に示してやることに他ならなかった。

宇宙の自然理性へと回帰し、万物の内に偏在する唯一の自然、即ち常に真であり続けるものを問い求めたレーヴィットにとっては、セネカやアリストテレスのみならず、仙台で出会った東洋的な思想が大きな役割を演じていたのである。「有名な禅の教えの一つにこういうのがあります。我々が無知な間は、正に山は山、河は河であり、それ以上でも以下でもないが、多少物が分ってくると、事情が違ってきて、それらは見方次第で様々な姿を取る様になる。しかし我々が完全な悟りを開いた後には、山は再び正に山、河は再び正に河に戻るのである。こうして最後に我々が、すべてあるがままにあり、別様ではありえないということを認めた時、世界と人間が、根源的な、そして究極的な姿で立ち現われてくるのである。」(58)

以下(第3部 クルト・ジンガー)次号

C Wolfgang Wilhelm

(注は41ページにあります)